

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 相引川に沿って歩く

講師 千葉 幸伸

(三木町文化財保護審議会委員)

平成25年11月24日(日)

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

## 1 相引川

屋島の南をめぐって海水の流れている川で、屋島は、その名のとおりこの川によって陸地と離れ、川は東西から汐が満ち、汐が引いたときに東西に引き分かれるので、相引きと名付けられていました。

現在でも、昔よりはその川幅は狭められていますが、その面影をとどめています。

現在の相引川は、三百十数年前の生駒時代、高松市松島町の百石新開、春日町の春日新開、木太町の新開などととも埋め立てられていたものを、高松藩祖松平頼重の命によって正保四年（一六四七）四月に水路を通じたものです。

## 2 総門跡

寿永二年（一一八三）九月、平氏は安德天皇を奉じて、屋島の行宮（内裏）ができるまで、六万寺を行在所としました。この時、この門を構えて海辺の防御に備え、また上陸の拠点としました。総門はこの遺跡です。

源氏が平氏軍を急襲した際、ここはたちまち源氏軍の占領すると



総門跡

ころとなり、ゆえに里人はここを源氏の総門と言います。

高松藩主松平頼重は、冠木門かぶきもんを建ててこの古跡を表しました。

一説では、現在の総門の東南に木戸（城戸）の地名があり、ここが当時の総門の跡であるとも言われています。

### 3 射落畠

源平合戦の際、源義経の四天王に数えられる佐藤継信が大將義経の身代わりとなり、平家の雄将能登守教経の強弓に射落とされた所です。

昭和六年（一九三一）五月、継信の孫である佐藤信古が墓所大修築とともに、この地にも柵をめぐらし、池泉を造り、射落畠碑と遠祖君乘馬薄墨碑を建立してこれを表しました。



射落畠

## 4 弓流し跡

義経は勝ちに乗じて海中に討ち入り戦ううちに、脇下に挟んでいた弓を海中に落としてしまいました。義経は必死になってその弓を拾おうとします。平家方の腰中次郎兵衛盛嗣は、義経に熊手をかけて引こうとします。これを見ていた源氏の軍兵どもは、「その弓捨てさせ給え」と申し上げたが、義経はなおも必死に太刀で熊手をあしらいながら、やっとこのことで弓をかき寄せ取り上げたといえます。危険を冒してまで弓を拾ったのは、平家に拾われて「源氏の大将ともあろう者がこんな弱い弓を使っているのか」と物笑いになるのを恐れたものだといわれています。

## 5 洲崎寺

〔宗派〕 高野山真言宗

〔由緒〕 洲崎寺は眺海山円通院と号し、大同年間（八〇六年〜八一〇年）に弘法大師により創建され、本尊である「観世音菩薩」は弘法大師の作であると伝えられています。

また、仁明天皇の承知九年（八四二年）に智証大師が密法修行の際、自ら不動明王の像を刻んで本堂に安置しました。本堂は大師の父・和気宅成の創建です。清和天皇は、洲崎寺を勅願所と定められました。



洲崎寺

寿永四年（一一八五年）屋島の戦にあたって、この付近は源平交戦の衝地であったので、ついに兵火にかかりました。しかし本尊ならびに霊像だけはその災を免れ、後二条天皇の乾元元年（一二〇二年）、紀州和歌山芦辺の裏に堂宇を移し、次いで天正の兵乱に名草郡山東荘黒岩村に移し、浅野幸長の入国で再び今の和歌山市片岡町に移されました。その後、徳川頼宣入国以来大いに修繕を加えて保護寺としました。現在の松生院（旧芦辺寺）がこれに当たります。

源平合戦時、佐藤継信は義経の身代わりとなり、能登守の矢を受けて忠死しました。義経は深く悲しんで、然るべき寺院に送って葬式を執り行おうとしましたが、戦時中のため棺などを備える便がなく、また周辺は放火して寺院もありませんでした。そこ

で洲崎寺の住僧に命じて、戦火によって焼け落ちた本堂の扉に継信の亡骸を乗せて、瓜生ヶ丘まで運び、読経供養させたと伝えられています。

## ※ 真念の墓

「四国遍路の父」とか「中興の祖」と言われる真念の墓は、洲崎寺の境内南西の隅に祭られています。

真念の生年月日は不詳ですが、土佐出身で江戸初期の人です。真言宗に属し、寺も師も持たない頭陀聖ずだひじりという、遍路門付けを主生活とした僧でした。

弘法大師に帰依して四国を巡ること二十数回、分かれ道に道標を建てたり、それまでは八十八に決まっていなかった霊場を一番から八十八番まで番号をつけて順路を決めた札所としたり、案内記等を出版しました。

墓は「四国遍礼名勝図絵巻四」に「原村の小高き岡の上にある」となっていました。実際は大町川東南三昧墓地に



真念の墓

あったのを尋ねだしましたがお参りしにくいということで、昭和五十五年（一九八〇年）二月、洲崎寺の境内へ移転しました。

## 6 田中家住宅（登録有形文化財）

〔主屋〕

年代： 明治十三年（一八八〇）頃

構造及び形式等： 木造平屋一部二階建、鋼板葺（藁葺）、庇瓦葺、建築面積約百六十平方メートル

田中家は大正三年に屋号一和堂で漆器商を創業しました。戦火にあい、明治十三年頃の建物を譲り受け、昭和二十年に屋島南麓に移住し、現在も居宅で使われています。屋島南麓の田園地帯の歴史的景観をつくる要素のひとつとなっています。

主屋の傾斜屋根は、四方蓋造りという建て方で、上屋部分を急勾配・寄棟造・鋼板葺（藁葺）とし、



田中家住宅（主屋）

その四方に、讃岐でオダレ・オブタ・オオブタと呼ばれている、本瓦葺の庇屋根を巡らしています。この下屋を四方に巡らせた造りは、元来は上層階級の住まいでした。

外装は真壁造り、腰部は立板壁、上部は黒漆喰塗壁で、室内は続き間の六室取り、土間（ニワ）が右側よりであり、座敷が左にあるので左勝手で、上層階級の間取りです。構造は、半間ごとに柱が建ち、丸太曲材を多用し巧みな梁組やなぐみです。座敷境は差鴨居を用いています。東端部の土間上部はヤマト天井といい、竹すのこ天井の上に泥土を置いており、小屋根裏部屋をつくり物置としています。

### 〔西蔵〕

年代：明治十三年（一八八〇）頃

構造及び形式等：土蔵造二階建、瓦葺、建築面積五十三・九四平方メートル

緩い傾斜屋根の上方は切妻造りで、下方の東桁行面の入り口戸前に庇屋根を差しかけ、蔵前庇をつくります。いずれも本瓦葺で、屋頂は冠瓦と熨斗瓦の組み合わせに両端鬼瓦を載せています。

外壁の軒鼻は内丸型の四方鉢巻付で、厚い土壁を白漆喰塗籠で塗り固め、螻羽けらばの切妻屋根の端は黒漆喰塗りがアクセントとなっています。西桁行面と南妻行面の二箇所二箇所の小さな高窓は鉄格子



をはめ込んでいます。正面は東桁行面の主屋側に入出口の蔵戸を二箇所設けています。

室内は、半間ごとに柱を立てる真壁造りで、土塗壁、木構造の折置組とし、小屋組は両端の天稗梁から地棟梁に登合掌梁を架けています。

現在は道具保管蔵に使われており、外周道路に西藏土蔵の裏面の白漆喰塗を見せて、白壁塀と一体となって景観を構成する存在です。

## 7 赤牛崎<sup>あかぼさき</sup>

寿永四年（一一八五）二月、屋島源平合戦の折、源氏軍は瓜生が丘に陣を構えました。

当時、屋島は島であったことから容易に渡ることができませんでしたが、たまたま高松方面（高松町）から赤牛が渡れるということを知った義経は、後藤兵衛父子ら源氏軍三十余騎に海を渡らせ屋島に上陸、浅瀬があること知った義経は、後藤兵衛父子ら源氏軍三十余騎に海を渡らせ屋島に上陸、平家軍の陣営に攻め寄せることができたと伝えられるところから、この地に赤牛崎の名が残っています。

## 8 牛塚神社

牛塚神社は、全国でも珍しい、牛を神体に祭った神社です。

寿永四年（一一八五）源義経による屋島攻めの際、付近を流れる現在の相引川を、牛が角に松明を付けて先導し、その後を追って義経は騎馬軍勢を進め「瀬の渡り」を敢行して屋島に攻め入りました。この事が牛塚神社創建の「いわれ」と牛への感謝となっています。

近年、老朽化で傷みが激しかったことから建て替え工事が行われました。

## 9 中村家住宅（登録有形文化財）

〔主屋〕

年代： 明治元年（一八六八）／昭和初期（一九二六～一九八八）増築

構造及び形式等： 木造平屋建、鉄板葺、建築面積二百五十五平方メートル

中村家は屋島塩業の三傑と言われた名家です。入母屋造、もと茅葺の四周に棧瓦葺の下屋庇を



牛塚神社

廻したつくりで、桁行八間、梁行五間の平面規模を有し、東南部に玄関と洋風応接間を、西側に仏間等を増築しています。玄関脇の格子窓に鏝を嵌め込むなど上質で凝った造作が特徴です。

〔庭門及び塀〕

年代：昭和初期（一九二六～一九八八）

構造及び形式等：庭門 木造、瓦葺、間口一・六メートル

塀 石造、瓦葺、延長九十一メートル

主屋の南側で南北方向に建ち、袖石塀の南端部は土塀、北端

部は式台玄関脇に取り付き、前庭と奥庭を仕切る役目を果たしています。延長約十メートル。中央に木造の平門形式、切妻造り、一文字瓦葺、軒先銅版葺、軒裏は網代組、幅一・六メートルで、門口をつくっています。袖塀の下方は石積塀で、上方は竹の枝を組んだ立会い垣、頂部は銅板で覆っています。柱や冠木等に奇木を用いた凝ったつくりで、主屋の座敷からの点景となっています。



中村家住宅（主屋）

〔塀〕

敷地の南・西にあり、南辺の基礎は花崗岩庵治石の延べ石上に、三段鍛壁を黒漆喰塗仕上げ、西辺の基礎は花崗岩庵治石の延べ石上に、白漆喰塗壁で角隅に角柱を埋め込んでいます。いずれも頂部は瓦で覆っています。広大な敷地を限るために設ける囲いや仕切りは、屋敷構えの構成上欠かせない要素であり、西南、西北角隅の景観をつくっています。

【参考文献】

文化庁国指定文化財等データベース

牟礼町史編集委員会『牟礼町史』平成五年三月二十日 牟礼町発行

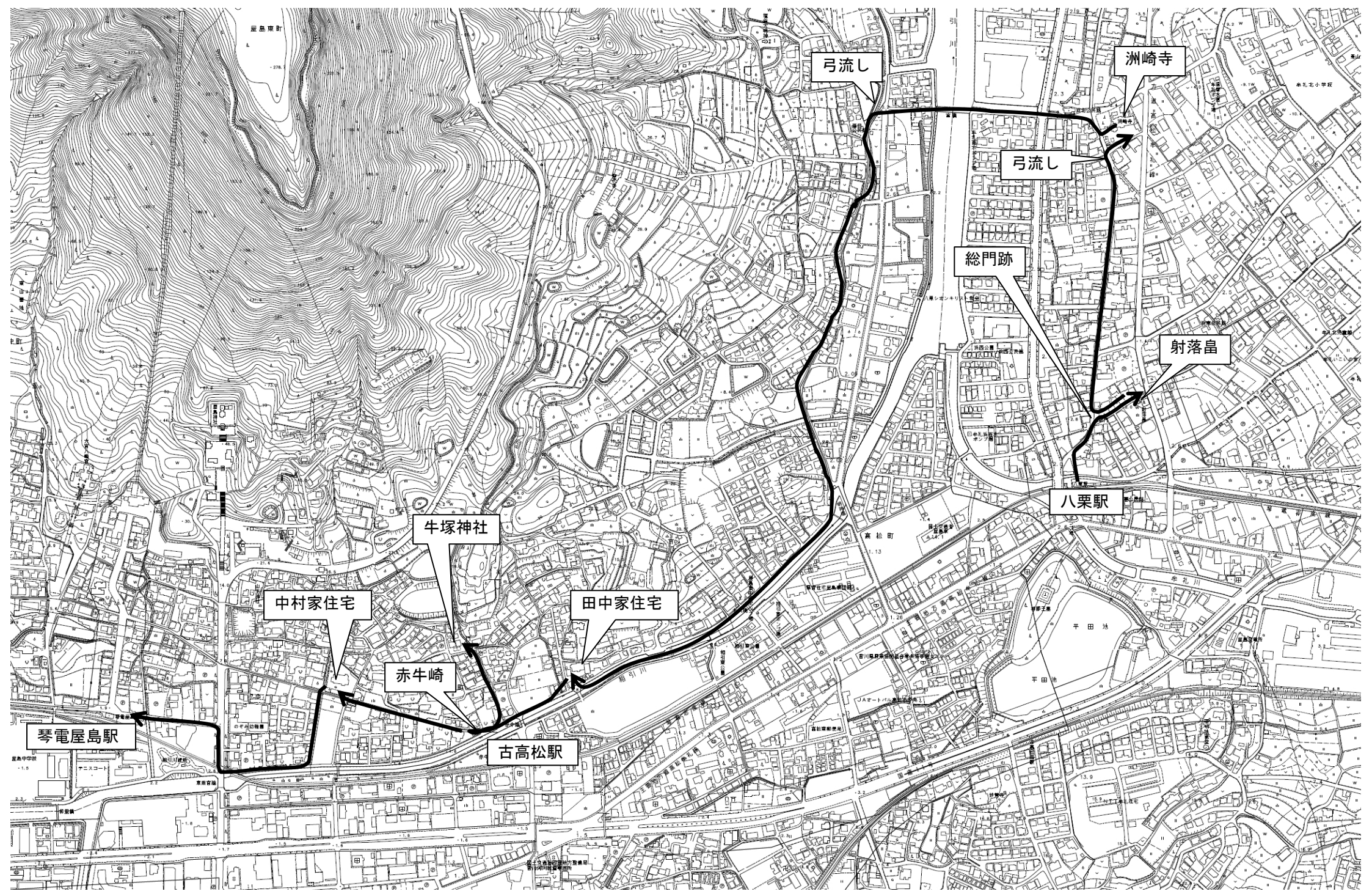
『牟礼町史』平成十七年十二月二十日 牟礼町発行

高松市史編修室『新修高松市史Ⅰ』昭和三十九年十二月十五日 高松市役所発行

古高松郷土史編集委員会『古高松郷土史』昭和五十二年二月二十八日発行



中村家住宅（塀）



弓流し

洲崎寺

弓流し

総門跡

射落島

八栗駅

牛塚神社

中村家住宅

田中家住宅

赤牛崎

古高松駅

琴電屋島駅

11月24日(日) 屋島東町からの復路

ことでん電車【志度線・上り】

|       |   |        |   |       |
|-------|---|--------|---|-------|
| (古高松) |   | (琴電屋島) |   | (瓦町)  |
| 11:58 | → | 12:01  | → | 12:15 |
| 12:18 | → | 12:21  | → | 12:35 |

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 香西の社寺を訪ねる

とき 平成25年12月15日(日)

9:30～12:00頃

集合場所 香西コミュニティセンター

※公共交通機関をご利用ください。



講師 立山 信浩さん(下笠居・香西郷土史講座講師)

☆開催案内は広報「たかまつ」12月1日号に掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課(TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」)でお知らせします。

(電話が通じない場合は、「実施」です。)

★次回の交通案内★

ことでんバス

|       |   |      |          |
|-------|---|------|----------|
| (高松駅) |   | (中塚) |          |
| 8:30  | → | 8:56 | (香西車庫行き) |
| 8:40  | → | 9:01 | (弓弦羽行き)  |
| 9:00  | → | 9:26 | (香西車庫行き) |

香西コミュニティセンター…中塚バス停から徒歩約3分

# 「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、  
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。  
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を  
一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけ  
ましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。